

風土



清 衡 桜
神 蔵 器

仮の世の光堂より穴まどひ

清衡はA B型てふ蓮は実に

清衡の枢の箱や鴟叫ぶ

たましひの離れてあそぶ雪蚩

中尊寺十月桜

身にしみて清衡桜と申すべく

蓮枯れて雲のあふるる鉢四十

竜頭鷓首浄土のいろは紅葉かな

鐘水に紅葉を流す毛越寺

義経の妻子の墓や螺旋稲架

二ふた夜や庵あん萩の盛りに来合せる

七五三行く衣川古戦場

みちのくの星の近づく刈田かな



竹間集

同人作品



秋 彼岸

鈴木とおる

再びの勢至菩薩へ萩くぐる
白等
萩の咲く新薬師寺に宿を借り
颯風を辰巳に迎ふ丘に住み
蕎麦の花小野寺城址へいく曲り
へちま忌や藻畳の上川流れ
鐘を鑄したたらの跡に曼珠沙華
妻の墓に先客のあり秋彼岸

秋 意

外川玲子

大黒坂ころがるやうに秋意かな
秋の湖ひとひらの雲生まれけり
釣舟草峠の空を支へけり
本家母の碑
拓本の十三文字や秋の声
段取りのすこし遅れて蕎麦の花
白木槿空いつぱいに母がゐて
四十年前の友を失ふ
九月逝く讚美歌三百二十番

秋 冷

山田暢子

萩咲くや名刺受けあり虚子の墓
萩の風京へをんなの一人旅
秋風や寂れし町のまた寂れ
夢に逢ふ人を待たせて虫時雨
支那前にて二句
幸せか不幸か芒揺れやまず
白樺の林抜けけゆく秋日傘
秋冷の色となりけりカルデラ湖

湯玉をどるや

— 南 うみを —

秋風や碎きて白き貝の殻
葛の花こぼれて散るや山女の子
山の影ふいにかぶさり貝割菜
数珠玉にたちまち冷ゆるたなごころ掌
燃えしふる鶏頭の根を打ちにけり
あぐら座へ湯気の枝豆はこぼるる
衣かつぎ塩ふる音のにぎやかに
糲殻も月のひかりの貝割菜
子をあやすやうに水漬きし稲起こす
砥石借りに刈田を踏めばやはらかき

稲掛けて夕日のいろの服はたく
頭から稲架へ突つこむ雀かな
新藁の弾みなだめつ括るなり
山の萩尻で揺らすや畝づくり
湯玉躍るや間引菜を驚づかみ
紫蘇の実を噛みゐて昼を酔うてをり
鳴高音いよいよ幟はためきぬ
直に立つさびしさ糶も電柱も
二歳とせの鋏にくさびや秋の暮
木の実降る音を肴に円座かな

山河集

同人作品



神蔵器選

さはやかや水巴の軸の雲なびく

柴田 久子

かるきものばかり着慣れて萩の花
ぶだう食ふ指先すでに古希を過ぐ
遠富士に顎突き出して鳥渡る
下野の蓑虫の顔地味なりし

白桃を剥けば聴ゆる父のこゑ

磯野 たか

町中に天使の声や小鳥来る
オホーツクはまなす熟れて実の赤し
ひぐらしや神奈川宿の高札場
涼新たダム吹き出す水抛物線

子規庵の糸瓜の下に思ふこと

島田 和子

見つかりし子規の遺墨や水澄めり
子規の机に肘ついて見る鶏頭花

律の井に伊勢の花火のはじけをり
時合せ上手な曼珠沙華の花

かみおろし闇に吸はるる神楽笛 井口ふみ緒

かみおろし(糸瓜)地に神楽笛(神楽)

台風の大円盤の端にかな
時宗開祖一遍の寺水の澄み
水彩の野菜の転ぶ子規忌かな
子規庵に「はて知らずの記」鱗雲

夕鴉の己が餅をやり過ごす 小林 和子

山見えずなりけり栗を拾ひつつ
一合の米炊くほかの菊脛

節句花子集、

飛天の句遺し花野を発たれけり
菊食べて姉妹おもひおもひかな

◇特別作品◇(抄)

仮眠

中嶋 陽子

中継車止まる桜の花の下
新しき名刺一箱青き踏む
春深きコーヒーの香の仕事部屋
春雷や少年事件のスクラップ
一客のコーヒーカップ春愁ひ
夜回りを終へて朝駆け蜆汁
夏兆す腕章留める安全ピン
地獄耳なのかもしれぬ熱帯魚
着ぶかれて夫送り出す午前五時
冬の月約二時間の仮眠かな

風土独語／神蔵 器



大声の羅漢にとんぼ止まりけり

安永 圭子

羅漢は正しくは阿羅漢。小乗仏教では修行者として到達しうる最高の位で、大辞林によれば阿羅漢に到達した境地に至ると、迷いの世界を流転することなく、涅槃に入ることが出来るとされている。しかし仏教では衆生を救って、その利益をはかる仏と区別し、自身の利を考えて世に隱遁する行者を言っている。如来のように仏教上の最高の状態であるわけではない。

羅漢はどこか人間臭い。五百羅漢の一人は自分自身か父親に似ているともいわれている。そんな人間臭い親しみのある羅漢さまであればこわい顔をしていても、とんぼも安心して止まるのである。大声の羅漢ととんぼ（たぶん赤とんぼ）との取り合せは絶妙である。

方舟の文学館に小鳥来る 林 いづみ

前書きが無いが、この句の文学館は山梨県立文学館である。文学館は、ほぼ甲府盆地の中央、芸術の森公園の中、山梨美術館に隣接して平成四年に建てられている。十月三日の蛇笏忌にオープンされ、約二ヶ月間「残後三十年記念飯田蛇笏展」が開催された

のが記憶にのこっている。

文学館は勿論、山梨ゆかりの作家と作品を展示しているが、飯田蛇笏をはじめ芥川龍之介、樋口一葉、井伏鱒二、太宰治、中里介山、深沢七郎、山本周五郎、伊藤左千夫と山梨の歌人たちなど、それぞれ後世に遺る偉大な仕事を成し遂げた人たちで、この人たちがその旧約聖書にあるノアの方舟に神に選ばれ、神の恩寵によって入ることを許された人々のごとく文学館に迎え入れられた人たちと作者は思ったのであろう。

なお、私もこの日三人ばかりで作者に同行しているが、前日からの雨で、山梨文学館に着いた時はどしゃ降りであった。旧約聖書では四十日四十夜雨は地に降りつづいたとあるが、蛇笏の生涯ただ一つの句碑「いもの露連山影を正しうす」を見たいと外に出た時は閉館近く山の雨はさらに激しく、広大な文学館の建物も、ようやく迫り来る夕暮と雨に烟っていた。世に文学館は多くあるが、山梨文学館こそ建物そのものが方舟に思えた。

洪水の後ノアの子セム、ハム、ヤベテはそれぞれ子供を得、やがてその子孫は地に充ちる。現代の作家、現代の俳人は如何に。

(以下略)

風土集



神蔵 器選

信濃 五句

東歌の手児を伝ふる曼珠沙華

横浜 安永 圭子

一匹のかまきり追ひし 駒跡

コスモスと常念岳と入る露天風呂

秋の水碌山素描の深さかな

大声の羅漢にとんぼ止まりけり

蟪蛄の蹴りの伝はる紙袋

絵馬の馬みないななきて台風裡

台風過木のない山に日の当り

白桔梗仏の母へともしけり

蓑虫に好きな高さのありにけり

薪抱へふくるる軒や大西日

長き棹利手に持てる案山子かな

蕉翁の目線に酒田八月尽

豊の秋村知り尽す火の見台

秋田 工藤ミネ子

秋燕のひととび山を切り返す

後より誰か付き来る良夜かな

来し方を思ふコスモス一抱へ

もの言はぬ雨のひと日や衣被

台風の来る日コロツケ売り切れし

携帯電話持たずに発ちし月の道

方舟の文学館に小鳥来る

夕空に水の匂へる新豆腐

色変へぬ松のけしきも小黒坂

山廬忌や後山の竹に花活けて

かまつかや墓地に変わりし桃畑

竿燈の百の灯統べる男かな

桔梗淋し束ねてもほどきても

朝顔や夫の健啖衰へず

決め難き終の栖やちちる鳴く

晴も褻も黄衣一枚蓮の寺

川崎 山本浪子

東京 林いづみ

東京 奥田茶々